

病理診断科

概要



病理診断科では、患者の方々から取らせていただいたお体の一部分を、特殊な方法で加工して標本を作成し、顕微鏡で観察することで、その病気がどのような種類のものか、どれくらい広がっているのか、抗がん剤などの薬が効くのかといったことを調べています（**病理組織診断**）。

また、たんや尿、胸やお腹のなかにたまった水のなかにある細胞や、あるいは子宮、甲状腺といった臓器から取られた細胞を標本にし、病気の原因となる細胞が存在しているかを顕微鏡で調べます（**細胞診**）。

病理組織診断および細胞診は、治療方法の決定に重要な役割を果たしており、患者の皆様にも適切な治療を受けていただくために極めて重要です。

さらに、ご遺族からの同意を得て、不幸にして亡くなられた方を解剖させていただき、亡くなった原因や病気の広がりなどを調べています（**病理解剖/剖検**）。病理解剖は、今後の医療の質の向上のために重要であり、また、亡くなった原因はなんだったのか、などご遺族からの疑問にお答えするという大きな役割を果たしています。

上記の業務を**病理診断**といいます。病理診断は医師が行う「**医行為**」とされており、病理診断を行う医師を**病理医**といいます。

病理組織診断や細胞診の標本作成は**臨床検査技師**が行います。また、臨床検査技師のなかで経験を積み、学会認定の試験に合格すると、細胞診を行うことができる**細胞検査士**になることができます。細胞診は細胞検査士と細胞診専門医がダブルチェックを行うことで質を保っています。



病理組織標本作製の様子

当院の特徴

当院には、2019年4月より、西播磨地区で唯一の常勤病理医が在籍しています。

常勤病理医がいる最大の利点は、土日を除く平日、いつでも「術中迅速診断」ができることです。

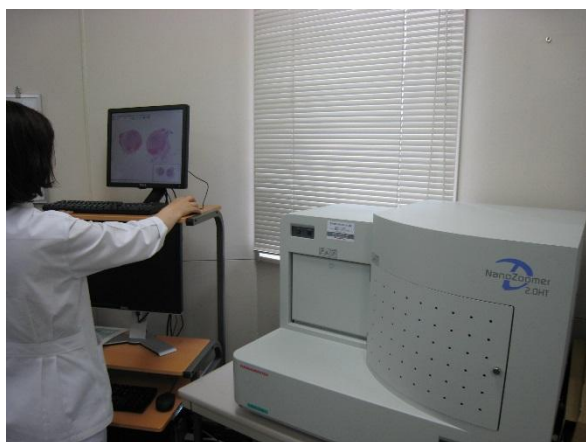
たとえばがんの手術で、採取された臓器の切れ端にがん細胞が残っていないかをしらべるために、切れ端を急速冷凍して標本作製します。この標本をみて診断するのが術中迅速診断です。がん細胞が切れ端になれば手術は終了します。一方がん細胞がまだ存在していれば、もう少し手術を続行してもらいます。



迅速診断標本作製の様子

術中迅速診断を行えば、手術室から切れ端が取り出されてから10分から20分後には診断結果が出るため、手術中に治療方針を決めることができます。これを平日いつでも行えるのが当院の特徴なのです。

さらに、常勤病理医が週5日診断を行っているので、お体の一部を採取させていただいてから、病気があるかないか、どのような病気かという診断の結果が出るまでの時間が早いのも特徴です。



バーチャルスライドシステム

また、「バーチャルスライドシステム」により、神戸大学医学部附属病院とつながっており、神戸大学から当院の病理組織診断や細胞診が行えるようになっています。これにより、何の病気かすぐには判断がつかない場合に、当院の病理医が神戸大学の複数の病理医と協議をし、当院病理医が出張で不在の場合、神戸大学の病理医が代行をすることができます。

病理医が皆様の前でお話することはあまりなく、皆様も病理診断や病理医の存在をご存じなかったかもしれません。しかし、現代の医療において病理診断は極めて重要です。当院は常勤病理医の在籍により、質の高い病理診断を常時行う体制を整えているのです。

スタッフ紹介

榎木英介 病理診断科部長 日本病理学会 病理専門医 日本臨床細胞学会 細胞診専門医 死体解剖資格

臨床検査技師 4名（うち細胞検査士 3名、認定病理検査技師 1名）

実績（2018年）

病理組織診断 2851件

細胞診 3340件

病理解剖 3件

実績（2017年）

病理組織診断 3064件

細胞診 4146件

病理解剖 11件